

四国の実地形を用いて1987年4月のやまじ風のシミュレーションを再実験し、地形の3次元的効果を含めたやまじ風概念モデルの改良版を提唱した。

#### 6. 四国付近における寒冷前線のふるまい

驚田 治 (高松地方気象台)

暖候期に四国地方を通過する寒冷前線は地上ではカタフロント型がしばしば見られ、この場合前線通過時の気圧、気温などの不連続現象も不明瞭なことが多い。さらに強雨は寒冷前線前面あるいは前方の暖域内のスコールラインの通過時のことが多い。

事例解析を行った1992年の二つの事例でも、スコールライン通過時の現象の方が顕著であった。4月15日の場合は、寒冷前線の前面に東シナ海の亜熱帯気団から暖湿気流が流入し、プレフロンタルスコールラインが形成された。西日本各地では突風、降雹などの現象があり、高松地方気象台の自記紙を見ると、気温の急下降、気圧の急上昇と強雨があり、あたかも寒冷前線の通過に伴う不連続現象の様であるが、気象衛星「ひ

まわり」の観測資料によると前線前面でクラスターが発生しており、また風向の変化が一時的であること、さらには温位あるいは相当温位の解析などから、プレフロンタルスコールラインの通過に伴う不連続現象であったことが分った。スコールラインの約2時間後に寒冷前線が通過するが、スコールラインで発生した積乱雲からの下降流と積乱雲によって形成された下層の冷氣プールにより寒冷前線の前面に寒気場が形成され、且つ地上では寒冷前線後面の寒気移流が弱かったために、前線の通過時の現象は顕著ではなかった。5月8日の事例でも突風、降雹があり、気温、気圧などの不連続が見られるが(高知地方気象台)、これもスコールラインによるものである。

前線前面に流入する亜熱帯気団との密度差と水平シヤーがスコールラインの形成に寄与しているものと推測される。また、スコールラインの後面の中層には顕著な乾燥した層があり、これがスコールラインでの積乱雲の持続した発生と発達に寄与しているものと推察される。



### 首都圏における多摩川及びその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究(助成)募集

#### 1. 募集対象

多摩川及びその流域の環境浄化を促進するために必要な研究

#### 2. 公募締め切り：1995年1月17日

学会推薦を必要としないので直接お申し込み下さい。

#### 3. 応募についての問い合わせ先

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号  
渋谷地下鉄ビル

財団法人 とうきゅう環境浄化財団

TEL 03-3400-9142

**情報 File****WCRP の事務局長に、グラスル博士が選ばれる**

P. Morel 教授の定年を受けて、WCRP 事務局長の後任が、ハンブルグ大学実験気象学教室主任で、マックスプランク研究所の部長を勤めるグラスル (Harmut Grassl) 教授に決定した。

グラスル教授は、地球システム科学の多くの分野、例えば大気放射学や、エアロゾルの数値モデルに及ぼす影響、リモートセンシングなどに造詣が深く、最初の二つの ERS 衛星の搭載測器の開発主任を勤めていた。彼は、学問以外にも、世の中と科学的な問題の関係に興味を持っており、気候変動に関する数多くの公開討議にも参加しているという。彼は、又、IPCC の科学に関する作業委員会の副議長でもあるという。

(住 明正)



*Prof. Harmut Grassl appointed new director of WCRP.*



## 教官の公募について

このたび、東京大学海洋研究所では下記の要領で教官（助教授）を公募いたします。御希望される方は連絡願います。

### 記

1. 採用人員 海洋気象部門 助教授 1名

### 2. 海洋気象部門の研究内容

当部門は、大気と海洋の相互作用に関係するさまざまな大気・海洋現象のメカニズムの解明を目的としています。現在、寒気団の気団変質過程、海洋上で発達するメソスケールの気象擾乱、集中豪雨、ヤマセ、人工衛星データを利用した大気海洋熱交換過程の研究などを行っております。今後は、このような研究に加えて、大気を海洋の上部境界として扱い、海洋混合層のメカニズムなど大気が海洋に与えるさまざまな影響に関する研究も行っていきたいと思っております。

この度の公募では、単なる気象現象だけでなく海洋内部の現象にも関心をもち、大気と海洋の相互作用を広い立場から研究することに意欲を持つ方を希望いたします。また、本学の理学系研究科の課程教官として、大学院教育にも携っていただきます。

### 3. 提出書類

- 1) 履歴書
- 2) 研究業績目録（原著論文、総説、その他）
- 3) 主要論文5編の別刷（又はコピー）各1部
- 4) これまで行ってきた研究の概要と今後の研究に対する抱負（1200字程度）
- 5) 推薦書1通又は応募者について参考意見を述べることのできる人（2名）の氏名及び連絡先。

### 4. 公募期限 平成7年1月17日（火）必着

### 5. 提出書類送付先（簡易書留で送付のこと）

〒164 東京都中野区南台1-15-1

東大海洋研究所

所長 平野哲也

### 6. 海洋気象部門の職員構成

教授	木村龍治	助教授	（本公募）
助手	中村晃三	助手	坪木和久
技術官	石川浩治	技術官	三沢信彦

### 問い合わせ先

Tel : 03-5351-6426（木村）

**編集後記：**ここ数年、夏休みは大学の野外実験で環八雲の観測をしています。環八雲は目で見えるので、その発生から消滅までを観察しながら観測できます。30名くらいの学生と共に代々木のオリンピック記念青少年総合センターに宿泊しました。今年は新館に泊まりましたが、一泊1100円はありがたかったです。複数の大学、研究機関の協力を得て、ボランティアで測器をもちより世田谷区、江東区、八王子でネットワーク観測をしました。

今年は猛暑となり、海陸風が発達して、午後には環八雲がしばしば出現しました。はじめて、ライダで環八雲をとらえることができました。またレンタルでオメガゾンデ（パイサラ社）を使用しました。データ取得部がウィンドウズの使えるパソコンなので、観測

しながら、気温、湿度のプロファイルのほか風のプロファイルも同時に見ることができます。これは画期的なことだと思いました。いくつかオープンした画面を同時に見ることにより、たとえば、気球が今、混合層の中にあるとか、雲の中を通過中であるとかが瞬時にわかります。

この観測を実施するためには、宿泊施設の確保、航空局、電波監理局、大学等への申請書作成などのマネージメントがあり、準備に半年かかります。毎年続けているのは、気象現象を自分の目で見て、肌で感じるのが楽しいからです。そういえば、昨年8月上旬は、都心で北風が吹いていたなあ。

（甲斐 憲次）